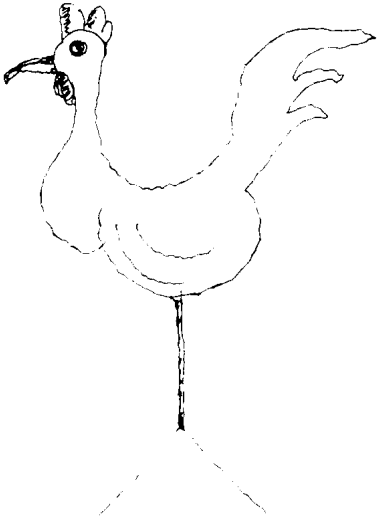
愛の風見鳥

田辺聖子

愛の風見鳥

田辺聖子



愛の風見鳥

著者　田辺聖子
発行者　大和たか
発行所　大和出版販売株式会社
東京都豊島区要町一～四三
郵便番号　一七一
電話東京九七四―五五七一
振替東京一八二七三六

（発行年月日・定価はカバーに表示してあります）

印刷・信毎書籍印刷　製本・誠幸堂
©1975 Seiko Tanabe　Printed in Japan
0093-040090-4452

愛の風見鳥・もくじ

1

愛の手紙　七
蝶のような女　一七
キイ・パーティ　二七
トモ子の初恋　三九
借りたヘアドレス　五一
麻美子の出発　六一
加奈子の失敗　七三
妻のある男　八三
恋の組合せ　九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

心がわり　一〇二
狂ったスケジュール　一一三
フランス人の青年　一二三
にえきらない男　一三三
エレベーターの恋　一四三

2

めぐりあい　一五五
再会　一七三
晴着　一八九
婚約　二〇五
わかれ　二二一

装幀／扉イラスト・カット・**灘本唯人**

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

広々とした田舎で育って、貧しいけれどものんびりした土地柄をみなれた目には、都会のスラム街の乱雑さは想像の外だった。

ほんとうに、道男はこんなところに暮らしているのだろうか？

路地の入り口には、中華そば、子供あいての駄菓子、といった屋台が置かれてあって、このへんはそれらを引いてあるく人たちのねぐらであることがわかる。

夜になると、屋台に灯が入って思い思いの方向に散ってゆくのであろうが、恵子はむろんそんなことを知らないので、ただもう、奇異なおもいで、路地から路地をさまよった。

恵子のさがしていたアパートは、多くある路地のうちの、いちばん奥の方で、しかも、その突き当たりだった。

「水森道男さんという人はいますか」

アパートの入り口で床机に腰かけて話しこんでいる数人の男女に、恵子はおそるおそる近づいて聞いた。

彼らはハタと話し止めて、顔を見合わせた。

「水森さん？……」

恵子の顔をじろじろと見る人もある。その中で若い男が、

「ああわかった、ホラ、二階の掃除屋やろ」

といった。彼は建設現場から抜けて来たように、黄色いヘルメットをかぶって作業服を着ていた。彼はぞんざいな口調に似ず、わりあい親切そうで、

「この階段を上って突き当たりを右へいった一ばん奥や」

と教えてくれた。
恵子はスーツケースを抱えるようにして立ちすくんだ。階段の登り口には足のふみ場もないほどに大小の下駄が散乱していたり、傘が横倒しになっていた。そして、せまい階段は、恵子でさえ、体を斜かいにしないとのぼれないほどの幅しかなかった。
その上、暗くて、目がなれるまでは、階段をふみ外しそうだった。
おそらくこの、小さなアパート、というより間仕切りの長屋には、幾組もの家族がひしめいて住んでいるにちがいない。赤ん坊の泣き声がし、男のどなり声がきこえ、テレビの音が高低さまざまにあちこちでひびいていた。
恵子が階段の下ですくんでいるのをみて、さっきの作業服の青年がもういちど、
「階段を上って、右の奥や」
と声をかけた。
それから首をつき出すように二階をのぞいて、
「おおい、八号室さあん、お客さんやぞウ」
とどなった。
恵子は思わずびくっとして、気おくれした。
彼女がさっさと階段をあがって、道男の室へ入れないのは、アパ　　し
たためだけではなく、三年ぶりで道男とあう、不安と嬉しさのまじった動揺のせいだった。
階段の上に人かげが立ちふさがって、どさどさとその人は下りて来た。恵子の目にまず入ったのはくたびれたズボンと汚れた素足だった。なつかしい道男の顔がつづいて現われたが、彼

は見違えるばかりふけてやつれていた。恵子が彼の変わりかたに胸をつかれるより早く、道男も、あっというように、恵子を見て表情をかえた。

「道男さん、あたし……」

「出よう」

道男は恵子の言葉をさえぎって、そそくさとはきものをつっかけた。

2

路地を出て、ドブ川づたいにしばらくゆくと少しばかりの空地(あきち)になっていて、子供たちが遊んでいた。裏手は柵のある池になっており、こわれかかったベンチがあった。道男はさっさとそこへいったが、恵子はスーツケースをさげたままなので足がもつれた。

「なんで来たんや」

「道男さん、怒ったの?」

「突然来たって……どうしようもないやないか。阿呆(あほ)な」

道男は下駄のつま先で乱暴に石ころを蹴(け)って、

「向こうみずに来たって……泊まる所もないのに……」

彼のとげとげしい口調に、気のよわい恵子はもう、涙ぐみそうになった。

彼女の予想では、道男は狂喜して迎えてくれるはずであった。いや、それは恵子の楽観的な想像ではなしに、道男は、今までの手紙にも何度もそのことを誓っていた。

三年前に、田舎を出て、都会へ就職した道男は、恵子に送る手紙に、
〈貧しくても二人の生活なら堪えられると思います。きっときっと、来て下さい。待っています〉
と書き、恵子は、
〈家の仕事で、いま私は出られないのですが、私の気持はきまっています。時期が来たら道男さんの所へきっとまいります。そのときを楽しみに働きます。道男さんも待っていて下さいね〉
と返事を出した。
恵子の家は農家だが、父の亡くなったあとは、母と恵子で農業をつづけていた。長男の兄は隣町の信用金庫へ勤めていて農業をつがなかったからである。兄が結婚したあとも、兄嫁は百姓はきらいだといって手を出さないので、恵子は母を助けて田畑へ出なければならなかった。
農家の青年から恵子に縁談が来たとき母も兄も、良縁だとすすめたが、恵子は断わりつづけた。農業を嫌いなわけではないが、道男と結婚することに心をきめていたからだった。
〈縁談がありますけれども、私はそのつもりもないので、話もろくに聞いておりません。私は道男さんよりほかの人のことを考えたこともありません。……とうとう、こんなにはっきり、書いてしまいました。
でも、道男さんは私が言わなくても、もうとうから私の気持はわかっていて下さるでしょう。私、はやく結婚したいんです〉
恵子は、はじらいながら、率直に手紙に書いた。

折返して道男から返事が来た。

〈さびしい大都会の片隅で、僕は君の愛だけをたよりに生きているのです。君の手紙でどんなに僕は勇気づけられるか分かりません。僕はまた、ちょっといい会社へかわりました。今度の方が給料もいいし、体もらくです。早く恵子を迎えたい、君をこの腕で抱きしめたいと思います〉

ついでまた、追いかけて、

〈僕の生活はちっともらくになりませんが、どうかがまんして下さい。二人でまじめに働いていれば、そのうち、うまくいくと思います。僕はまた、こんど会社をかわりました。前の所は将来性がなかったのです。こんどはよいと思います。早く、恵子が来てくれて、二人で暮らすようになればいいな、と思っています。本心をいえば、今すぐ来てほしい、何もかも捨てて、今すぐ、僕のところへとんで来てほしいのです。——僕の恵子へ〉

恵子は、道男の手紙に心を熱くした。いわば幼なじみで、中学を一しょに卒業するまで、仲よくして来た、何もかも知り合った古いなじみの道男だったが、三年間の別離は、恵子の恋心を、あたらしくかきたて、彼ひとりだけが、だんだん胸の中で大きな存在をしめていった。

道男の手紙によると、会社をたびたびかわって生活が不安定らしいのが心配ではあったが、二人のやりとりする手紙はいまや、熱狂的なラブ・レターになっていった。

3

「わたし、出て来て、悪かったかしら」

恵子はつぶやいた。

「母が亡くなったんで、わたし一人で畑仕事はでけへんし……兄夫婦があとをとった家には、居辛うなったんやもん……それは手紙でいうたでしょ」

「わかってるけど、急に出て来たって……」

道男はいらいらしたように恵子の言葉をさえぎり、

「来るなら来るで、前以て手紙でも……」

「そんなひまがなかったのよ。嫂さんとけんかして……夢中で……」

「けんか？　そんなこと、おれの知ったことか」

道男は心から不快そうだった。

恵子は途方にくれて、いまは涙も出なかった。三年間、手紙をやりとりして、幼い恋を育てていたのはうそのようだった。

悪い夢でもみている気がして、ただぼんやり、してしまった。

「道男さん……いま、会社はどちら？　さっきの人が掃除屋なんていってたのはなあに？」

恵子はおずおずときいた。

「清掃会社や。ビルの掃除を請負う仕事なんや」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com